HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小学校高学年における学校生活と自尊感情・学校適応感の関係 : 予備的検討
Author(s)	岩田, みちる; 谷中, 久和; 関, あゆみ
Citation	子ども発達臨床研究, 15, 51-56
Issue Date	2021-03-25
DOI	10.14943/rcccd.15.51
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80837
Type	bulletin (article)
File Information	060-1882-1707-15.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

資料論文

小学校高学年における学校生活と自尊感情・学校適応感の関係

― 予備的検討 ―

岩田　みちる[1]・谷中　久和[2]・関　あゆみ[3]

Relation between school life, self-esteem and school adjustment among elementary school students
― a preliminary study ―

Michiru IWATA, Hisakazu YANAKA, Ayumi SEKI

要　旨

学校生活への意識に対する尺度（岡田，2008）を用い小学校 5、6 年生を対象として、学校生活のどのような側面が学校適応感と自尊感情へ影響を及ぼすかを検討した。因子分析の結果、小学生における学校生活への意識はおおむね中学生と同様の因子構造であったが、クラス活動に貢献する項目が中学生とは異なる領域に分類された。次に、小学生における学校生活の因子構造に基づいて学校適応感と自尊感情への重回帰分析を行った結果、学校適応感には「クラスの意識」、自尊感情には「学業の意識」が影響しており、影響する学校生活の側面が異なっていた。このことから、学校が楽しいという感覚にはクラス単位の安定した人間関係が、児童生徒の自身に対する肯定的な感じ方には、授業内容が理解できる感覚を持てるような工夫が有益である可能性が示唆された。

キーワード：学校生活，学校適応，自尊感情，児童
Key words：school life, school adjustment, self-esteem, elementary school children

問題と目的

児童の発達において学校生活の経験は発達に大きく影響し（遠矢，2009）、例えば学校生活への適応は人格形成に影響すると指摘されている（岡本，1999）。また、学校生活は児童の心理的な状態に対する影響も大きく、Rosenberg（1986）は学校的文脈が自尊感情に影響すると指摘している[注1)]。自尊感情の低さは鬱や不安との関連性も指摘されている（Sowislo & Orth, 2013）。したがって、児童生徒が楽しく過ごし、自尊心を持つことができるような学校生活の環境づくりは重要である。この点において留意しなければいけないのは、学校適応と自尊感情は乖離しうるということである。

[1] 北海道大学大学院教育学院　博士後期課程
[2] 鳥取大学地域学部　講師
[3] 北海道大学大学院教育学研究院　准教授

10.14943/rcccd.15.51

つまり、問題なく学校生活を送っていても自尊感情が低く自分に否定的な場合や、逆に学校生活を楽しくないと感じていても自己評価は低くない場合もあるだろう。また、学校生活には友人や教師などの人間関係、学業など様々な側面が存在し、それらが児童の学校適応や自尊感情に与える影響は一様ではないと考えられる。学校生活のどのような側面が学校への適応や自尊感情に影響を与えるかを理解することは、不登校や鬱などに対する予防的な対策をとるためにも有用である。

学校生活と学校適応の関係について、岡田（2008）は中学生を対象に友人・教師との人間関係や学業、進路など様々な側面に対する生徒自身の意識を学校生活として調査した。その際、学校適応の指標として環境に合わせて変化できる順応と、その環境を楽しく（不満に感じず）過ごす享受を用いた。その結果、学校への順応・学校生活の享受の双方にクラスへの意識が影響していたが、順応には友人への意識、享受には教師・校則への意識が影響するという違いが明らかにされた。学校生活と自尊感情の関係については、小学生の自尊感情への、教師の賞賛（古市・柴田，2013）、家庭や友人関係（加藤・西，2010）など対人的な側面の影響は明らかにされているが、学校という環境の特徴的な側面である学業や、校則などとの関係については検討されていない。また、学校生活が学校適応と自尊感情に与える影響の違いについても検討されていない。そこで本研究は、同一の項目を用いて学校生活のどのような側面が学校適応と自尊感情へ影響するかを検討することとした。

なお、学校生活と学校適応に関する先行研究は中学生を対象にしているが（岡田，2008）、小学生は金銭・時間・あるいは移動手段などの点で保護者の制約が強く、学校生活においても、生徒に与えられる選択肢はさほど多くない。さらに、小学校は学級担任制のため学級が最も重要な準拠集団であること（近藤，1994）などを踏まえると、小学生における因子構造や、評価に適した項目は中学生とは異なると予想される。従って、小学生を対象として調査を行う場合には因子構造を再検討する必要がある。

以上から、本研究ではまず児童自身の学校生活のさまざまな側面に関する意識を評価するために、「学校生活の下位領域への意識」尺度の因子構造を明らかにする。次に、小学生における因子構造や適合項目を用いて、学校生活がその児童の学校適応感や、自尊感情にどのような影響を与えているかを検討する。

方　法

1．調査協力者

北海道の公立小学校計3校の小学5，6年生551名を対象に質問紙を配布した。調査は2020年2月～3月に行われ、1校はクラスごとに担任が質問紙を配布して回収し、残りの2校は郵送で回収した。その結果、131名からの回答を得た。

2．調査内容

⑴　**学校生活の下位領域に対する意識**：「友人」・「学業」・「教師」・「クラス」・「進路」・「部活動」・「他学年」・「校則」に関する岡田（2008）の質問紙を用いた。回答は「とてもあてはまる（4点）～まったくあてはまらない（1点）」の4件法で求めた（39項目）。なお、「部活動」（6項目）と「他学年」（5項目）は無回答が多く、小学生には不適切な質問と考えられたため、これらの項目は検討から除外した。

⑵　小学生で調査をするにあたって、項目が主体的で答えやすいことから岡田（2008）の検討した学校適応のうち、学校享受感尺度（古市，玉木，1994）を用いた。回答は「よくあてはまる（5点）～ぜんぜんあてはまらない（1点）」の5件法で求めた（10項目）。

⑶　**自尊感情**：自身への尊重や価値を評価し、「これでよい」と感じる程度を評価するために、Rosenberg（1965）の山本、松井、山成（1982）による邦訳版を用いた。「あてはまる（5点）

～あてはまらない（1点）」の5件法で求めた（10項目）。

3．分析

⑴「学校生活の下位領域に対する意識」の因子構造の検討

「学校生活の下位領域に対する意識」の回答に不備がない101名を分析対象とした（5年生60名、6年生41名）。

⑵「学校生活の下位領域に対する意識」、「自尊感情」と「学校享受感」の関係の検討

すべての質問紙の回答に不備のない88名を分析対象とした（5年生54名、6年生34名）。

結　果

⑴　学校生活の下位領域に対する意識の因子構造

学校生活の下位領域に対する意識について、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。因子数の決定には固有値1以上を基準とした結果、8つの因子が検出された。しかし因子7，8は該当項目が1つのみであり、解釈妥当性の観点からも6因子での解釈が妥当であると考えられた。そこで、因子数を6つに規定して再因子分析を行い、因子負荷量の絶対値が.40以下の項目を除外した結果、21項目が選出された（Table 1）。項目の内容からF1は「教師への意識」因子、F2は「クラスへの意識」因子、F3は「友人への意識」因子、

Table 1　学校生活の下位領域に対する意識の因子分析

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性*
先生にしたしみを感じる。	0.94	−0.21	0.00	−0.17	0.11	0.14	0.82
担任の先生とはうまくいっていると思う。	0.87	0.30	−0.23	−0.03	−0.07	−0.10	0.68
学校内には自分の悩みを相談できる先生がいる。	0.62	0.06	−0.09	0.15	−0.03	−0.04	0.43
自分を認めてくれる先生がいる。	0.47	−0.03	0.07	0.38	−0.11	0.02	0.53
学校内には気軽によく話す先生がいる。	0.44	0.03	0.20	−0.10	0.12	−0.01	0.37
自分のクラスは仲のよいクラスだと思う。	−0.01	0.91	−0.30	0.05	0.00	0.02	0.60
クラスの中にいると，ほっとしたり，明るい気分になる。	0.05	0.76	0.11	−0.03	0.03	−0.01	0.73
学校内には気軽に話せる友だちがいる。	−0.22	−0.02	0.88	−0.19	0.16	0.11	0.70
たよりにできる友だちがいる。	0.34	−0.25	0.70	0.11	−0.16	−0.06	0.61
クラス内には色々な活動やおしゃべりに誘ってくれる友だちがいる。	−0.04	0.17	0.62	0.08	−0.17	0.01	0.48
友だちとの付き合いは自分の成長にとって大切だと思う。	0.09	0.23	0.50	−0.16	0.06	0.20	0.66
自分のクラスの活動に貢献していると思う。	−0.13	0.21	0.07	0.63	−0.09	0.10	0.48
学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる。	0.10	−0.08	0.04	0.60	0.11	0.13	0.57
授業の内容は理解できている。	0.01	−0.01	−0.08	0.57	0.02	−0.10	0.27
学習内容をより理解するための，自分なりの学習の仕方がある。	−0.01	−0.09	−0.26	0.46	0.28	0.06	0.33
自分の進みたい職業の分野については自分から調べている。	0.05	−0.10	0.01	0.17	0.76	−0.14	0.61
私は自分の将来や夢に希望を持っている。	0.05	0.15	−0.17	−0.15	0.71	0.12	0.54
私は自分にあった進路を考えている。	−0.15	0.06	0.05	0.31	0.52	0.04	0.47
学校の校則はやぶってもいいと思う。†	−0.15	0.01	−0.01	0.10	−0.05	0.80	0.59
校則はあった方がいい。	0.10	0.07	−0.08	−0.07	−0.01	0.65	0.46
学校の規則はちゃんと守っている。	0.32	−0.10	−0.05	0.08	−0.01	0.59	0.60

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F2	0.44				
F3	0.57	0.60			
F4	0.47	0.22	0.33		
F5	0.34	0.39	0.37	0.33	
F6	0.54	0.43	0.50	0.44	0.28

* 共通性はSMC法によって推定された

† 逆転項目

F4は「学業への意識」因子、F5は「進路への意識」因子、F6は「校則への意識」因子と命名した。クロンバッハのα係数はそれぞれ0.82, 0.74, 0.78, 0.66, 0.74であった。「学業への意識」のクロンバックのα係数の値はやや低いが、項目数が少ないことが影響したと考えられ、一定の内的一貫性が確認されたと考えられる。

⑵ 自尊感情・学校の享受に影響する学校生活の領域

学校生活の下位領域に対する意識が、自尊感情と学校の享受感にどのように影響しているのかを検討するため、重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 2）。その結果、自尊感情は「学業への意欲（標準化偏回帰係数$\beta = .31$, $p < .01$）」に有意に影響されていた。一方、学校享受感は「クラスへの意識（$\beta = .44$, $p < .01$）」に有意に影響され、「教師への意識（$\beta = .20$, $p < .07$）」は有意傾向であった。なお、共線性の統計量はいずれも許容度が.10以上、VIFは10未満であり、多重性共線性に問題はなかった。

さらに、Kendallの順位相関係数（両側検定）を用いて自尊感情と学校享受感の関係を検討した。その結果、相関係数は$\tau = .262$（$p > .00$）で学校を楽しいという感覚と自尊感情にほぼ相関が認められなかった。

Table 2　学校の享受と自尊感情の規定要因

	学校享受感	自尊感情
	β	β
友人への意識	0.09	0.16
学業への意識	0.15	0.31**
校則への意識	0.16	−0.13
進路への意識	0.11	0.09
教師への意識	0.20†	0.11
クラスへの意識	0.26*	0.14
Adj. R^2	0.41	0.21

値は標準化偏回帰係数
*$p < .05$　**$p < .01$　†$p < .07$

考　察

学校生活の下位領域：中学生との違いについて

学校生活の下位領域に対する意識の因子構造を検討した。その結果、中学生（岡田，2008）と比較すると小学生は選出される質問項目数が減少したが、因子の種類はおおむね一致していた。唯一違いが見られたのは、「自分のクラスの活動に貢献していると思う」（以下，クラス活動に貢献）という項目であった。小学生の場合は「クラス活動に貢献」が「学業への意識」（例：勉強には自分から自主的に取り組んでいる、授業の内容は理解できている）因子に含まれたが、中学生の場合は「クラスへの意識」（例：自分のクラスは仲のよいクラスだと思う、クラスの中にいるとほっとしたり明るい気分になる）因子に含まれていた。このような違いは、小学生と中学生にとって「クラス活動に貢献」することの意味の違いを反映していると考えられる。その背景として、まずクラス活動の質的な違いが挙げられる。小学生は中学生と比較すると相対的に自立性が低く、クラスの活動に関しても教師主導的で、主要な判断や枠組みを決定するのは教師である。そのような環境で実施されるクラス活動で貢献することに関連した項目は、「勉強に主体的に取り組む」「自分なりの学習の仕方がある」（下線部は筆者による）など生徒の主体性を問う内容が多かった。このことから、小学生における「学業への意識」は、自分なりに現状を変えられる、困難を克服できる、という自己効力感を反映していた可能性がある。一方で、中学生の場合は生徒主導的な活動が増えるため、クラスの活動で貢献するにはクラス内の良好な人間関係が重要なのかもしれない。今回の調査は自己効力感を評価できる項目を含まないため検証はできないが、小学生にとって学習内容が理解できる、理解するための方法を知っているという感覚や、クラス活動に貢献できているという感覚は、学校生活の中で自己効力感を感じやすい場面である可能性がある。

小学校高学年の学校の享受に影響する学校生活の領域

学校生活の享受（学校適応感）に影響する学校生活の領域は「クラスへの意識」であった。これは中学生での結果と一致している（岡田，2008）。なお、中学生は「教師への意識」「校則への意識」も影響していたが、小学校高学年では「教師への意識」が有意傾向、「校則への意識」は有意水準に達しなかった。このような中学生と小学校高学年との違いは発達的な変化という個人因子と、学校体制の違いという環境因子が影響していると考えられる。中学生は発達的に自立心が高まる時期であり（本間，2000）、自分のコントロール可能性が低いことはストレッサーとして経験されやすいとされる（三浦・坂野，1996）。学校において、児童生徒は教師を主体的に選択したり変えたりすることはできないため、教師との関係性は自立心が高まりつつある小学校高学年から学校生活の享受感に影響し始め、中学生ではより強い影響因子となると考えられる。また、小学校高学年における学校享受感には「校則への意識」が影響しないが、中学生では影響していた。中学生は自立心が高まる時期であるがゆえに、学校側の管理が厳しく、教師や校則の柔軟性が乏しくなる（Eccles et al., 1993）。このようなトップダウン的な校則による管理が厳しい中学校では、校則への納得感が学校の享受感に大きく影響する一方で、小学校はこのような管理が少なくため、校則への意識が学校享受感に影響していないと考えられる。

小学校高学年の自尊感情に影響する学校生活の領域

小学校高学年の自尊感情に影響する学校生活の領域は、「学業への意識」であった。学業は試験の得点や成績表などによって明示的な評価として提示されることから、そのような外部的な評価が児童の自身への評価に影響しやすいのかもしれない。古市・柴田（2013）は小学生5，6年生の自尊感情が教師の称賛に強く影響されることを明らかにしている。学校生活において教師は様々な場面で生徒に称賛を与えるが、特に学業に関する事柄は称賛が得やすく、本人もその称賛に納得しやすいと推察される。これに加えて学業の評価は学校だけでなく家庭での評価にも影響しうる。このような複合的な要因により、学業に関する領域が自尊感情へ影響する因子となったと推察される。

学校適応感と自尊感情に影響を与える学校生活の領域の違い

学校適応感と自尊感情に影響する学校生活の要素は異なり、さらに、学校適応感と自尊感情に相関関係は認められなかった。つまり、子どもが学校で楽しく過ごせていれば自尊感情が高いわけはなく、逆もしかりである。小学生は中学生と比較すると子どもたち独自で行動できる範囲が少ないものの、近所の人間関係や学外のスポーツ活動などのサードプレイスや家庭など、学校以外にも過ごす環境が多層的に存在する。活動の領域が狭い小学生にとって学校生活は生活の主要な環境であり、学校生活での経験は適応感や自尊感情にそれぞれ影響する。しかし学校生活の享受が自尊感情と関連しないことは、小学生の自尊感情には学校生活だけでなく、家庭やそれ以外の環境が貢献している可能性を示唆した。

今回の研究から、小学校高学年において学校が楽しいという感覚にはクラス単位の安定した人間関係が、児童生徒の自身に対する肯定的な感覚には授業内容が理解できる感覚を持てるような工夫が重要である可能性が示唆された。このような工夫は、小学校の生活で困難を抱える児童への支援や、不登校や鬱などへの予防的な工夫としても有用かもしれない。

なお、今回の調査では、データ数が少ないことから男女別の検討は行わず、小学校高学年での検討を行った。しかし自尊感情への影響因子や、学校生活の楽しさに関しては男女で異なると報告されている。例えば、教師の称賛が自尊感情に及ぼす影響は男児よりも女児の方が大きく（古市・柴田，2013）、女児は男児よりも自尊感情が低下しやすい（都筑，2005）とされる。したがって、今後は性別や、今回の学校生活には含まれなかった学校外

の環境を含んだ検討が必要である。

注

1　Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. G. Greenwald（Eds.）Psychological Perspectives on the self, Vol. 3. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, 107-136　が入手不能のため，須崎・足井（2013）による。

引用文献

Eccles, J. S., Midgley, C., Wigfield, A., Buchanan, C. M., Reuman, D., Flanagan, C., & Iver, D. M. 1993 Development during adolescence: The impact of stage-environment fit on young adolescents' experiences in schools and in families. *American Psychologist*, **48**(2), 90-101.

本間友巳　2000　中学校の登校をめぐる意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究，**48**，32-41.

古市雄一・柴田雄介　2013　教師の称賛が小学生の自尊感情と学校適応に及ぼす影響　岡山大学大学院教育学研究科研究集録，154，25-31.

古市裕一・玉木弘之　1994　学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究収録，**96**，pp.105-127.

近藤邦夫　1994　教師と子どもの関係づくり：学校の臨床心理学　東京大学出版会.

三浦正江・坂野雄二　1996　中学生における心理的ストレスの継時的変化　教育心理学研究，**44**，368-378.

加藤佳子・西敦子　2010　小学生の家族関係および友人関係における自尊感情と全体的自尊感情との関連　日本家政学会誌，**61**，741-747.

岡田有司　2008　学校生活の下位領域に対する意識と中学校への心理的適応―順応することと享受することの違い　パーソナリティ研究，**16**，388-395.

岡本真彦　1999　学校学習の心理と指導　北尾倫彦・林多美・島田恭仁・岡本真彦・岩下美穂・築地典絵（著）学校教育の心理学：明日から教壇に立つ人のために　北大路書房，pp.49-86.

都筑学　2005　小学校から中学校にかけての子どもの「自己」の形成　心理科学，**25**，1-10.

東京都教職員研修センター 2009　自尊感情や自己肯定感に関する研究　東京都教職員研修センター紀要，**8**，3-26.

遠矢幸子　2009 学校と仲間関係　青木多喜子・戸田まり（編），無藤隆・森敏昭（シリーズ監修），心理学のポイントシリーズ：児童心理学　学文社，pp.84-85.

Sowilo, J, F., & Orth, U. 2012 Low self-esteem predict depression and anxiety? A meta-analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, **139**(1), 213-240.

須崎康臣・足井彰　2013　小学生と中学生を対象にしたRosembergにおける自尊感情尺度の妥当性，信頼性および因子構造の検討　日本生活体験学習学会誌，**13**，93-98.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1994　自尊感情尺度（Self-Esteem Scale）　堀洋道・山本真理子・松井豊（編）心理尺度ファイル　垣内出版，pp.67-69.